月刊「日本教育」１１月号（Ｒ２）

教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長　室之園晃徳

1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

海外の離島の話ですが、「通信環境が悪くオンライン授業を受けられない小学２年の孫のため、祖父が電波の届く丘の中腹に木を活用した勉強スペースをつくった。」という記事を見付けました。「孫のためなら」という見出しの小さな記事に思わず顔がほころびます。同時に「オンライン授業は通信環境とスマホさえあれば世界中どこでも可能なのだ」ということを改めて思い知らされたような気がしました。実際、文科省の遠隔教育システム実証研究の委託を受けて実践を積み重ねている我が三島村も、ＩＣＴのハード面が特に充実しているわけではありません。Wi-Fi 環境とパソコン、タブレット端末などの機器があるだけです。最低限の環境さえ整っていれば、無料で便利な Web 会議ツールを使って、シンプルにオンライン授業をすることができます。何事もこの「シンプル」ということが、継続して実践していくための重要なポイントだと思います。かつては大型の専用機器が必要でコストも高く、使用場所も限定されているというイメージが強く残っている古い頭には、「え、これだけ？」と拍子抜けしてしまいそうです。

さて、問題はこれをいかに活用するかです。村の学校では、右の表に分類されている内容には全て取り組んでいます。始めは単発的・イベント的に行っていたこれらの実践を、日常的な実践に進化させる、つまり点を線にする作業は、思った以上に骨が折れる作業でした。

合同授業型	遠隔交流学習
	遠隔合同授業
教師支援型	ALTとつないだ遠隔学習
	専門家とつないだ遠隔学習
	免許外教科を支援する遠隔授業
教科充実型	教科充実型の遠隔授業
その他	遠隔会議、遠隔研修・研究授業等

〈遠隔教育の類型・分類〉

日常的な実践を実現するには、学校の校時表をそろえ、時間割をそろえ、授業の進度をそろえていくことが必要です。イベント的な場合は、スポットを絞って日程や時間を何とか調整するのですが、年間を通してとなると面倒な作業を省略しなければ「シンプル」＝「継続」というわけにはいきません。各学校にはそれぞれの学校文化があり、各行事は地域の伝統や実態を考慮して組まれています。一律にそろえることには先生方もかなり抵抗があったようです。しかし、苦労して何かを創り上げていく作業は、人の心に火をつけ、苦しみが喜びへと変化していく作業でもあります。手始めに取り組んだ数学と英語では、年間の８割～９割の遠隔合同授業を実現しました。また離島の小規模校では、免許外教科を複数持たざるを得ない現状がありますが、他の学校に専門の教師がいることでその負担解消に効果を発揮しています。さらに、教師相互の指導法のスキルアップや子どもたちの学力向上にも手応えがあり、研究の推進に弾みが出てきています。

「アナログの時代はよかった」とか言ってる場合ではありません。「AI に仕事を奪われる」という話も聞こえてきます。これからの未来を生きる子どもたちはコンピュータを使いこなさなければ生きてはいけないのです。点を線につなぎ、線を面に広げ、そしてデジタル時代を真に生き抜く人間力が求められています。

月刊「日本教育」１２月号（Ｒ２）

教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長　室之園晃徳

1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会長も務めた。

「三島村に、なぜジャンベなのですか？」とよく聞かれます。ジャンベとは、西アフリカに伝わる民族打楽器です。

村の子どもたちは、みんなジャンベを叩くことができます。アフリカンダンスも踊ります。港では、ジャンベのリズムでお出迎え。三島村は知る人ぞ知る「ジャンベの島」なのです。

中学生ジャンベ演奏

三島村が、西アフリカのギニアと交流を始めて26年。日本の小さな離島の村と西アフリカ、そしてジャンベ。この不思議な組合せに「なぜ？」と疑問をもつのは当然なことです。

それは1994年、日本各地で競うように特色ある村おこし、町おこしが展開されていた頃、村おこしの一つとして実施した「三島っ子ジャンベツアー」がきっかけです。西アフリカ・ギニアのジャンベの神様と称されるママディ・ケイタさんが日本ツアーに来日した際に、島の子どもたちにジャンベを教えながら、一緒に演奏ツアー（夏休み18日間）を行うという奇想天外な事業。実はその事業を担当したのは、当時、派遣社会教育主事として村教委に派遣されていた私でした。当初は、この交流は単発的なイベントで、その後も交流が続くとは考えてもいませんでした。村おこしといっても、資源が乏しい村では小刻みにジャブを繰り出すしかない状況。もしかして話題になればと取り組んだ事業です。しかし、NHKのドキュメンタリーで放映されるなど、その反響は想定外に大きく、会心の一撃となったのです。その後も毎年、島を訪れることになったママディさんが蒔いたジャンベの種は、さまざまな色の花を咲かせ、しっかりと根付いています。

ギニアとの交流は少しずつ深まり、東京オリンピックではホストタウンを務めることになって、ギニア大使も島を訪問してくださいました。更に昨年の夏、村の子どもたちは、横浜で開催された「アフリカ国際会議」関連のイベントに出演。「野口英世アフリカ賞」の授賞式では、天皇皇后両陛下御臨席の下、総理やアフリカ諸国首脳の前で演奏するという望外の貴重な体験をすることができました。

また、昨年は「ママディさんの村の子どもを島に呼びたい」という長年の夢もかないました。過去に三島村の子ども代表４人がギニアの村を訪問しています。三島村長もギニアの村に診療所を寄贈するために訪問しましたが、そのときに子どもたちを招待することを約束していたのです。島を訪れたギニアの子は、以外にもジャンベを叩けなかったので三島の子が彼らにジャンベを教えました。まさかの逆輸出。その不思議な逆転の光景は、何とも興味深いものでした。

ギニアの村訪問（筆者Ｒ１）

遙かな海を越えた二つの村の交流は、最初はすぐに切れそうな細い糸のようでした。しかし、何事も継続することが力となり幸運を引き寄せるものです。26年を経て、強い糸へと進化していったのです。国際化が叫ばれる中、この小さな村のちょっと変わった交流も、国際交流の一つの面白いモデルになればいいと思います。